

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21943

研究課題名(和文) 東アジアにおける翻訳と制度:Philosophyをめぐって

研究課題名(英文) Translation and Institutions in East Asia : On Philosophy

研究代表者

許 智香 (HEO, Jihyang)

立命館大学・衣笠総合研究機構・助教

研究者番号：60876100

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は西洋哲学の「人文学」化と、西洋哲学の「学知」化が「内地」と「外地」それぞれに何をもたらしたか、以前の歴史との違いは何であったかなどについて「帝国主義と植民地主義」の観点から分析することを目指した。これまでの研究では、西周(1829-1897)がフィロソフィーを翻訳したこと、東京大学の哲学部をめぐる人物と学科課程が明らかにされたが、それは、哲学および哲学部が出来上がってからの事情を詳しく論じたものであった。本研究では、それぞれについて翻訳や学科編成がなされる以前からの様子について史料に基づき、翻訳と制度が「偉業」や「近代的事業」に収まらない、歴史的偶然と全体の中にあることを論証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、翻訳と近代以後の諸制度に関する一国的説明を止揚する目的で、「近代」がもたらした翻訳と制度の具体的な様子を一時史料に基づいて論証することを目指した。特に日本で行われた翻訳と制度が日本の近代化と啓蒙化のみならず、それと同時に、朝鮮半島においては植民地化をもたらしたことを常に意識した。普通、翻訳や学制は、何かの編纂、何かの生成というプラス的な側面で説明されがちである。本研究では、それらの負の遺産について、制度の突発性(本研究者の東京大学の前史調査)や、帝国知識人の世俗性(安倍能成に関する本研究)を批判的に指摘してきた。

研究成果の概要(英文)： This study aimed to analyze from the perspective of "Imperialism and Colonialism" what the "Humanization" of Western philosophy and the "scholarship" of Western philosophy brought to the "inner land(内地)" and "outer land(外地)" worlds, respectively, and what the differences were from previous history. Previous studies have revealed the translation of Philosophy by AMANE Nishi(西周, 1829-1897), and the personalities and courses surrounding the Department of Philosophy at the University of Tokyo, but these studies have discussed in detail the circumstances after the establishment of philosophy and the Department of Philosophy. In this study, based on historical documents about the situation before the translation and the formation of the department for each, I argued that the translation and the institution were not contained in a "great achievement" or a "modern project" but in a historical coincidence and a whole.

研究分野：人文学

キーワード：西周 京城帝国大学 安倍能成

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近代日本で生成された翻訳概念については、主に国語学史の分野において研究がなされている。とくに明治期の語彙史研究では、明治以来定着した翻訳語の由来を江戸末期の字典から探り、単語の初出やその流通について明らかにしている。これらの研究が以前とは異なる近代語の性質を明らかにし、意義のある成果を出してきたのは事実である。だが、ある言葉がどのメディア、どの字典に登場するのかを時系列に並べることに重点がおかれているため、次の三点において問題を含む。言葉の翻訳、および定着に関わる文脈や思想的背景の考察が欠けている。日本語の歴史を単線的に規定し、そのなかで日本語の形態が近代的な言葉として整えられていく過程に基づいて近代以降の翻訳語を捉えている。明治以降に誕生した多くの翻訳語が、それ以前には存在しなかった新たな造語であるという事実に関する適切な説明が見当たらない。一方、日本思想史の分野における漢字翻訳語に関する研究も少ないながら行われてきた(丸山真男『翻訳の思想』、子安宣邦『漢字論』等)。しかし、丸山の研究では「明治初期の翻訳」という問題を「日本の近代化」の過程のなかで考察しており、植民地への拡張という問題が視野に入っていない。また子安は、長らく続いてきた漢字圏という圏域を念頭に置きながら、近代日本の翻訳という出来事によって近代以前とは異なる表意性が言葉に与えられていく事態を批判的に考察しているが、漢字の表意的な性質を重視する反面、漢字がもつある種の「記号」としての性質は考慮していない。本研究では「東アジアにおける翻訳と制度」について、まず、(1)近世末から近代初期を軸に、西周(1829-1897)やその次の世代にあたる旧東京大学の哲学科における翻訳経験を対象とし、かれらをめぐる漢字圏の様相の変化について、当時の政治的背景を重視しつつ具体的に論証しようとした。また(2)帝国における学知の形成が東アジアに及ぼした影響について、植民地朝鮮の唯一の官立高等教育機関であった京城帝国大学の哲学関連講座を中心に実証的に検討しようとした。

### 2. 研究の目的

本研究は、近代東アジアの歴史を「東アジアにおける翻訳と制度」という概念を用いて、とりわけ次の二つの問題意識を中心に新しく展望することを目的とした。とりわけ、近代の東アジアにおいて漢字はどのような役割を果たしてきたのか。われわれの言語世界において、近代日本で生成された概念および学知制度が伴う植民地的状況とは何か、の二点である。具体的には、西洋のアルファベット概念を急速に漢字に置き換えてきた近代日本の経験を明らかにし、それが東アジアに広がっていく過程を辞書と制度を通じて問う。では、それらの概念および学知制度が植民地朝鮮に伝わり、今日に至るまで韓国の人文社会学全般に通用する言語世界を形成したことの意味を掘り下げることであった。

### 3. 研究の方法

基本的に文献調査と史料調査で行ってきた。研究目的に関しては、まず、白川静の作業などをベースに、漢字一つ一つにつきまとわられてきた源泉的情報を確認した上で、それが明治の概念として意味を成していく過程を「異質な」ものとして把握する。また、既存とは異なる新漢語となった概念が、近代の学制化過程においてどう広がっていったのかを東京大学の前史から探った。に関しては、「哲学科」を中心に帝国日本の教育制度が植民地朝鮮にいかにかに伝播していったかを、「京城帝国大学」に関する資料を用いて実証的に分析する方法を用いた。特に、今まで知られていなかった安倍能成(前、京城帝大哲学哲学史講座教授)の講義録や日記を現地調査を通じて把握し、その全貌を文字化する方法で研究を進めてきた。

### 4. 研究成果

(2020年度)

西洋哲学関連文献の翻訳リストの作成を試みるという目標のもとで、1880年から1910年までに出版された中世哲学関連文献を収集し、検討を行った。本年度、明治期における中世哲学研究に注目した理由は、井上哲次郎の『西洋哲学講義』(1881)以後、いわゆる「日本形 観念論」に用いられる概念の拡張段階を、西洋哲学史翻訳作業から確認するためであった。また、上記の成果を(韓国)崇実大学校主催の国際シンポジウム「The Sinographic sphere and the Western Medieval Philosophy—The current status of

translation of Western Medieval Philosophy and several related subjects” (The Institute for Korean Christianity Culture, 2020年10月30日)で発表した。一方、京城帝国大学の哲学関連講座に関するこれまでの研究成果を「京城帝大における法文学部の安定的設置」という観点からもう一度整理し、学会で発表した(武蔵大学主催、2021年2月27日)。これに関しては「植民地期朝鮮における京城帝国大学哲学関連講座の特殊性 ―「支那」系講座編成を中心に―」というタイトルで論文作成を完了し、2022年度に論文が掲載された。

(2021年度)

西周に関する研究論文を2編、京城帝国大学の哲学関連講座に関する研究論文を1編発表できた。では、これまでの西周研究―人文学で多く使用される翻訳語を作り上げ、近代的な学問活動を可能にしたとされる西周理解より多様な側面を与える目的のもとで、『西周哲学著作集』(1933)の編纂背景および『百一新論』(1874)の受容史について実証した。特に前者では『西周哲学著作集』が西周に関する初めての著作集であることを重視し、なぜ「全集」「政治集」などではない「哲学著作集」になったかに焦点を当て、編者である麻生義輝のアナキストから明治文化研究者への転換に『西周哲学著作集』が持つ意味を明らかにした。また後者の論文では、これまで『百一新論』に関する理解―近代主義、啓蒙主義―を再考察する目的で『百一新論』に関する、これまで知られなかった戦前の書評、選集類を網羅し『百一新論』に関する多様な理解が戦前から存在していたことを実証した。 に関しては2021年9月に韓国学中央研究所で本人が行った講演「植民地朝鮮にとって西洋哲学とは何か」をもとにその内容を拡張させ、京城帝国大学における「朝鮮儒学」の位置付けについて、内地の東京帝国大学「支那」関連講座との関連性から考察した。特に で論じた問題は、「朝鮮儒学」が日本の「支那」学知の枠組みのもとでいかなる制度化過程を経たかという問いである。朝鮮総督府は、京城帝大を設置する以前から既存の「成均館」を「経学院」に変更させるなど、さまざまな儒教政策を行ってきたが、京城帝大の学部設置問題に関わっていた内地の「支那」系の学者から見れば、それは「近代的学問」にならないとされた。このようなさまざまな矛盾と既存の勢力の中で、植民地朝鮮における最高の高等教育機関で「朝鮮儒学」はいかなる近代的編成をなしたかについて の論文で論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 許智香	4. 巻 53
2. 論文標題 現実政治と翻訳：明治初期軍政史と西周	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史研究	6. 最初と最後の頁 113-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 許智香	4. 巻 40
2. 論文標題 西周哲学著作集の編纂背景：麻生義輝の転回と明治日本	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本思想	6. 最初と最後の頁 263-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 許智香
2. 発表標題 The Sinographic sphere and the Western Medieval Philosophy : The current status of translation of Western Medieval Philosophy and several related subjects
3. 学会等名 2020 KICCS(The Institute for Korean Christinity Culture)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 許智香
2. 発表標題 哲学関連講座からみる京城帝国大学法文学部の特殊性
3. 学会等名 解放後の韓国文学・文化史の再認識・
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 許智香
2. 発表標題 京城帝国大学に関する最近の研究状況
3. 学会等名 Keijo Imperial University: Discussing Colonial Knowledge and Academism (Italy, Cafoscari Uni.
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 尹貞蘭, Sebastian. C.H.Kim, Kenneth Wells, 李哲, 李成賢, 許智香, 尹寧実, 成周鉉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 BOGOSA	5. 総ページ数 291
3. 書名 近代転換空間における社会文化現象：西欧と東アジアの遭遇	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------